



明治時代の 絵画教育にせまる

美術教育講座 准教授 ^{たけ うら} 竹内 ^{しん ぺい} 晋平

私の専門分野は美術教育です。常にいくつかの関心あるテーマをもち、同時に複数の研究を進めています。その一つが美術教育史についての研究です。具体的には、「絵を描くこと」に関する教育の歴史について調査・研究しています。美術教育史を研究していて興味深いと思うことに、「絵を描くこと」を学ぶ方法は時代によって違いがあるということです。今回は、明治時代に行われていた絵画教育について紹介しましょう。

明治時代に展開した 毛筆画の教育

日本で近代的な学校制度が始まった明治時代、「図画」も普通教育の教科として指導されていました。当時は、西洋の絵画技法をまねた鉛筆画教育と日本の伝統を生かした毛筆画教育が混在していました。それぞれに教育的な意義はあったのですが、明治中期になると特に女学校において毛筆画教育が盛んに行われるようになります。どうやら、上流階級の女子教育において四季の花鳥等を筆で描く技量をもつことは、茶道や華道、和歌などとならんで文化的な嗜みの一つと考えられていたようです。

そんな女学校などで使われた図画教科書を集めて調査することは、私の研究では重要な作業となります。この時代の「絵を描くこと」を学習する方法は、図画教科書をお手本にして臨写することが中心でした。ですから、当時の教科書を開いてみると、ところどころに墨や絵の具の汚れがついています。女学



明治時代に刊行された図画教科書群

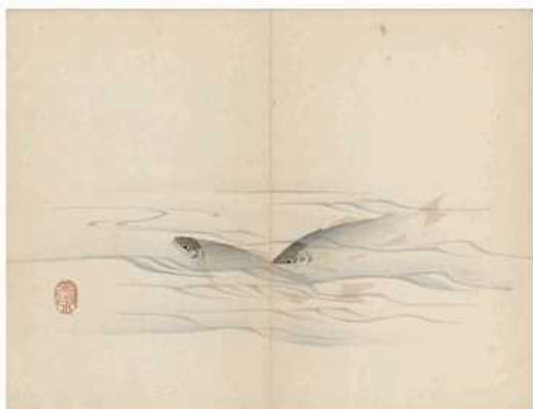
生がお手本に向き合って学んだ奮闘の跡なのでしょう。当時の図画教科書は、画家が描いた原図をもとにして手仕事で多色木版印刷・製本された、大変貴重なものでした。

図画教科書と絵画作品の モチーフがそっくり

近年、私が研究対象にしているのは京都府内の女学校で使用された図画教科書と、その教科書を使用



クローズアップ



望月玉泉『玉泉習画帖』第四冊(龍)、「香魚」(1891)
竹内晋平研究室 所蔵

した実際の絵画教育についてです。100年以上前に使われた教科書なので、すでに散逸が進行し収集作業も容易ではありません。そこで、大学が夏休みになり、まとまった時間がとれると全国の図書館や資料館、そして古書店、古美術商などをまわって収集を進めます。

そんな収集の作業を進めていると時折、「あの教科書で見たものとそっくりのモチーフだな…」という出会いがあります。例えば、明治時代に京都で活躍した日本画家・望月玉泉(1834-1913)が作成した図画教科書(左上)と、同じ玉泉が描いた掛軸(右上)には、いずれにもよく似たアユが描かれています。描かれたアユの数に違いがありますが、魚体の描き方だけでなく線で表現された水面にも親近性を感じられます。おそらく、この図像は画家の中で定型化した構図として成立したものであったか、流派が保有する同一の粉本から引用されたと想像されます。この他にも玉泉が作成した図画教科書には、江戸時代に活躍した円山応挙(1733-1795)による「朝顔狗子図杉戸」(板地着色、東京国立博物館)と酷似する子犬が描かれています。そして玉泉の教科書には、呉春(1752-1811)の「蔬菜図巻」(紙本墨画淡彩、泉屋博古館)に描かれた聖護院蕪、松村景文(1779-1843)「花卉図」(板地着色、善願寺)の黄蜀葵等と親近性の高いモチーフも掲載されています。

このように、日本画家が作成した図画教科書に自身や自身に近い流派の作風があらわれる例は、明治時代中期の図画教科書で散見されます。特に『玉泉習画帖』ではこの傾向が顕著で、円山・四条派の描



望月玉泉『香魚図』掛軸、部分(1911)
竹内晋平研究室 所蔵

法が明治時代の女子教育で花開いた例であるといっても過言ではありません。おそらく、円山・四条派の優美かつ繊細な雰囲気、明治時代の女子教育において期待された良妻賢母のイメージと重ねられたためだと考えられます。

明治時代の学校教育には、西洋の制度や教育方法が流入しましたが、絵画教育においては日本の伝統文化に根差した教材作成が模索された時期でもありました。換言すれば、これらの図画教科書は、江戸絵画の伝統を後世に伝えるメディアの役割を担っていたと位置づけることができます。

現代の美術教育への示唆

このような美術教育史の研究は、未開拓の部分が多くこれから明らかにしなければならない点がたくさんあります。一方で、私は美術教育史研究と並行して、「美術教育史研究で得られた知見をどのようにして現代の美術教育にフィードバックするのか」というテーマでも研究を進めています。具体的には、明治時代の教材を使用して、小学校の図画工作科で



毛筆による絵画指導を行うという実践を展開しています。この取り組みの特徴は、明治時代のお手本を臨写する技量を高めることのみを意図したものではなく、児童が主体的に運筆方法や描く順序を思考する点にあります。単なる作業として臨写するのではなく、筆先の感覚に集中して墨の濃淡だけでモチーフを再現したり立体感を表現したりする活動は、児童にとっては細かい判断の連続となります。一見、臨写による教育は児童の創造性が制限されるように捉えられがちですが、授業設計しだいでは思考力や判断力を育成するのにふさわしい深い学びを伴った活動となる可能性をもっているといえます。

現在の小学校に明治時代の教育方法を持ちこんだ授業実践研究の成果は、研究論文や国際学会等で発表しています。今年8月に大韓民国・大邱で開催された国際美術教育学会では、これまでの研究を総括する口頭発表を行いました。発表後には多くの質問が寄せられるとともに、各国の研究者による口頭発表からは「どのようにして自国の伝統文化を活用して現代に必要とされる資質・能力を育てるのか」という点に関心があることがわかりました。

今年は次期学習指導要領が公示され、教育現場や関係者の方々からは「これまでと何が変わったのか」という点に注目が集まっています。美術教育を研究している立場としては、今後も時代に合わせて視点を変化させていくことの必要性和、伝統の中から新しい価値を見出すことの大切さを念頭に置き、よりよい教育を創造していきたいと考えています。



国際美術教育学会(35th World Congress of the Int'l Society for Education through Art)における口頭発表(2017年)

付記：

本稿の内容は、下記の研究論文の内容に基づいています。

- ・竹内晋平「京都府画学校関係者による毛筆画教育への関与(2)－『玉泉習画帖』に掲載されたモチーフの意味－」、『美術教育学』第38号、2017年(公益財団法人 DNP文化振興財団「グラフィック文化に関する学術研究助成」による)
- ・竹内晋平「明治期毛筆画教科書『玉泉習画帖』にみられる図画教育観－京都市立芸術大学所蔵の粉本群(望月玉泉筆)との図像比較を通して－(教科書研究奨励金交付論文)」、『中研紀要教科書フォーラム』第12号、2014年(公益財団法人 中央教育研究所「教科書研究奨励金」による)



プロフィール

美術教育講座

准教授 竹内 晋平

専門は、美術科教育(授業実践研究、美術教育史)、彫刻制作。京都市立芸術大学美術研究科博士(後期)課程修了(2013)。博士(美術)。京都市立小学校数諭等を経て、2012年より現職。

